

女性のライフコースの世代間比較 系列分析による職業経歴の記述

黒川すみれ（福岡県立大学）

1. 問題背景と目的

ライフコースは単なる個人の人生 (life) ではなく、その社会に出現するパターン化された人生の道筋 (pathways) であり、当該社会の社会構造を反映したものであるという認識のもとで、社会変動を考察するためのきわめて重要な資料となってきた (Elder 1992)。近年よく耳にする「人生の多様化」「キャリアの多様化」という言説は、人生の道筋が増えたことを意図したものであり、特に女性のライフコースの変化を想定して「多様化」という言葉が使われている。こうした「多様化」については、近代家族に代表されるような、戦後日本に多くの人々が歩んだ「標準的なライフコース」は温存されたまま、「標準」の代替的選択肢としての「周辺のライフコース」が出現してきたことが、いわゆる「多様化」の内容だという指摘がある (嶋崎 2013)。

ライフコースの世代間比較の研究は数多いが、その多くが世代ごとの集団としての状態分布を記述して比較するもの (例:M 字カーブ) である。このアプローチは、コーホートとしての経験されやすいライフコース (「標準」) は明らかになるが、「周辺の」ライフコースの内容は見えづらい。先行研究にもとづいて「多様化」議論をするのであれば、標準的ライフコース以外の軌跡 (周辺のライフコース) の内容とその変化を追うことが必要となる。本報告では、個人のライフコースを計量的手法で記述することにより、周辺のライフコースがいかに出現してきたのかを可視化することを試みる。

2. データと方法

分析には1985年、1995年、2005年、2015年のSSM調査を統合したデータセットを用いる。40歳時点までの職歴情報がある女性を分析対象とする。出生コーホート別に個人の職業経歴を記述したのち、クラスター分析により職歴を分類して、各コーホートでどのような職歴パターンが抽出されるかを比較する。職歴の記述には系列分析 (Sequence Analysis) を適用する。系列分析は履歴データがもつ膨大な情報量を効果的に縮約する手法であり、特に国外では系列分析を用いたライフコース研究は少なくない。本報告では、職歴で記述したライフコースの世代間比較を行う。

3. 結果

女性のライフコースは、1930年代生まれまでは「就業経験なし」が主流、1940～1960年代生まれは「専業主婦 (+再就職)」が主流、1970年代生まれ以降は「就業継続」が主流となる。各コーホートでもっとも大きな割合を占める職歴パターンを「標準的ライフコース」とすると、近年になるにつれ「標準的ライフコース」の比率は小さくなっていた。代わりに、「標準」を代替する「周辺のライフコース」が出現するが、コーホートによって「周辺のライフコース」の出現の仕方が異なることが明らかになった。「標準」の縮小と「周辺」のパターン拡大によって「多様化」が進んでいることが示唆される。

Elder, G. H., 2000, "The Life Course," Borgatta, E. F. & R. J. V. Montgomery (Eds.), *Encyclopedia of sociology* (2nd ed). New York: Macmillan, Vol. 3, pp. 1614–1622.

嶋崎尚子, 2013, 「人生の多様化」とライフコース：日本における制度化・標準化・個人化」田中洋美・M. ゴツィック・K. 岩田ワンケナイト編『ライフコース選択のゆくえ：日本とドイツの仕事・家族・住まい』新曜社, 2-22.

【付記】

本研究は東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター2025年度課題公募型研究会「社会調査データの合併による二次分析研究の刷新」の研究成果である。

(キーワード：ライフコース、職業経歴、系列分析)